

## 仏教は 苦悩すること 意味を見いだした 教えである

巖城孝憲



### 発刊にあたって

推進員の皆様におかれましては、日頃の生活の場や各寺院・二十一組並びに教区等の場において、お念仏・聞法の推進に励まれておられることと御推察いたしお慶び申し上げます。

この度、第二十一組推進員の皆様の機関紙として本誌を発刊する運びとなりました。

これは、昨年二月から一期・二期の推進員数名と任職数名で月一〜二回会議を行い、昨年十二月に「第二十一組推進員の集い」を開催させて頂いたことを縁に話が進んできたこととなります。

本誌が今後の皆様の推進員としての活動のヒントや助力になるようお願いいたします。

また、今後皆様方に、より一層ご協力賜わることでありたいと思いますので何卒よろしくお願い申し上げます。

二十一組 組長 日野廣宣

「推進員になったけれども…」(要約)

第十八組遠慶寺住職 大橋 慶貞 師

「推進員の集い」講義から一部抜粋

2014/12/6

柏原市から参りました大橋と申します。今日は事前「推進員になったけれども・・・」と講義をいただきました。

そこで、まず推進員は何をする人なのかを共に考えていきたいと思えます。まず誘い合ってお寺に行く。お誘いをするとというのが、大切な役割ですね。

ところが、誘ってもお友達がなかなかお寺に来てくれないということはないですか。「話が難しくよく分からない」ということもよく聞きます。確かに楽しくないと行く気がしませんし、何かそこで得るものがないと足が向きません。

では、いったい私たちはお寺に何を求めているのか、その辺から考えたほうが良いみたいですね。

私に浄土真宗という仏教を教えてくださいましたのは、寺川俊昭先生です。大谷大学で、先生のゼミに入れていただいたのですが、まあ先生のお話は難しいです。

しかし先生の側(そば)におりますと、言葉ではなくて、先生の生き様から伝わってくるものがあります。

先生は一言でいいましたら大変謙虚な方なんです。学生の前でも絶対に偉そうにな

さらさない。自慢話もありません。

それともう一つは、与えられたお仕事、それぞれの雑多のことが毎日あるではないですか。そういう一つの細かいことをきっちりと丁寧に果たしておられました。お見送りのしつとすると学長先生が私たちみたいな若造に頭を下げるんです。

私は寺川先生のお姿から、ここに生きて仏教があるのだなあ、と教えていただきました。



私たちは、楽しいことや自分にとって都合のよいことは進んでいますが、しんどいことや都合の悪いことは、ついつい遠ざけます。しかし、自分にとって都合の良いことも、都合の悪いことも「全部丸ごと」のままが私の人生であったかと、私の人生のすべてを引き受けて、処していける。

そういう、励ましや勇気をいただけるのが、南無阿弥陀仏と念仏して生きる信心の生活だと、先生から教えていただきました。

皆様も推進員養成講座の最中に、よく「信心が大切です」とお聞きになられたことかと思えます。そして「お寺というのは、信心を獲得するための教えを聞く道場だ」と。

ですから推進員のお仕事は、まずは自身の聞法を推進していくという事です。そして聞法の努力によって、私が南無阿弥陀仏と念仏するものになって、信心を喜ぶものになってゆへ。

それが実現していったならば、自ずと人を誘って「念仏はいいものですよ。南無阿弥陀仏はこんな素晴らしい。みんなでお寺にいつて、私が頂いたこの素晴らしい南無阿弥陀仏をみんな分かち合いますよ」ということができます。

こうなったらやはり説得力もあります。自分が実証していますからね。やはり心動かされるものがあると思つのです。

文責 山雄竜磨

## 同朋の声

原 昭夫さん(真宗寺所属)

私が推進員になりましたのは先代住職にいろいろと助けて頂きました事がきっかけです。妻に先立たれ何もする気力の無かった私に何かと心を掛けて頂き、その嬉しさや忘れる事が出来ず何かお返しが出来ないかと思つたのです。

まず、私が出来た事はお寺の催事に参加させて頂き、一人でも多くの檀家の人にお寺に関心を持って頂く縁の、少しでも手助けになればと思いました。

当所はいろいろと悩む事が多く有りましたが、その都度、門徒の仲間に助けて頂きました。

その間には、先代住職が病で倒れられ(今では元気になっておられます)今の住職に代わられました。「この時には」そうだ、今、力になってあげなければ」と思い、お寺の今後についていろいろと住職に進言させて頂きました処、気さくに私の意見を聞いて頂き今日に至ります。

私は現在、門徒会員、推進員を兼ねていますが、以前は会議の事を何一つ報告しておりませんでした。しかし、現在では住職から「会議の詳細をどんな事でも良いから報告して欲しい」と言ってもらい、メール又は書面で報告しております。

そのことをお寺の月刊誌『菩提樹』に載せて頂き、今では何も知らなかったと言っ門徒の方々にも私たちの活動がわかってもらえるようになりました。

何か自慢話のようになりましたが、皆様も、自分の中に留め置かずお寺に帰られましたら、会議の事のお話をして頂けましたら、今後の私たちの活動の指針になるのではないかと思えます。

最後に「一人では何も出来ないが、多くの人の力知恵を借りれば何事も達成できる」とこの文言を心に秘め頑張って行きたいと思えます。

合掌

## 推進員への縁

松本 喜久雄さん(南通寺所属)

ある日、普通の生活が一変する出来事がおきました。妻が体調不良になり、病院に行ったところ、精密検査が必要との事で入院したのです。最初は、健康診断のような事と軽く考えていましたが、検査に係る日にちが多く少し変だと思い始めるようになった頃、最悪の結果が出たのでした。

妻は、それから約一ヶ月後に、小学五年生・中学一年生の二人の娘を残して四十九歳の若さで帰らぬ人となりました。

検査結果を誰にも伝える事ができなかつたこの一ヶ月間の苦悩は、書き表せない程あります。

また、この現代医学に見放され溺れる者は藁をも掴む心境であった時に、知人でもある宗教家がお見舞いに来て、病気が治るようにとお祈りをしてくれました。

そして「あなたが、教団の本部で講義を受けこの道に入れば必ず奥さんの病は治ります」と勧められ、私はその教団の本部に行くことになりました。ところが、その甲斐なく数日後に妻は他界したのです。知人の気持ちは有り難く思いましたが、その宗教には入る気がしませんでした。

それどころか、私は「この世に神も仏もあるものか」と思うようになったのです。

合掌

とはいえ、放っておくわけにもいかず、お葬式をし、毎週、中陰のお勤めは住職に来て頂き、子ども達と一緒にお話しを聞きました。そして、満中陰はお寺でお勤めをして頂きました。

その後お仏壇を買い、毎月の命日に住職に来て頂くようになったが、ある日、住職に思い切った話をしました。

「私は、今まで何をしてきたのでしょうか。家族の為に小さな会社を立ち上げ、一生懸命に働き、新しい住まいも買い、それなりの生活が出来るように頑張りました。

ところが、大切な妻が病に侵されている事に気が付かず、子ども達は母親を亡くしたのです。悔やんでも悔やみきれないとはこのことです。私は自分を責めることができませぬ。仕事をやる気も無く、全てが虚しく思います。」

不思議なことに、その時の住職のお話ははっきりの思い出すことは出来ません。それでも、毎回、色々な話しをして頂きました。

月日が過ぎ、住職も息子さんと交代されましたが、お付き合いは続いています。

七年前に現住職さんから、推進員養成講座を受けませんかとの誘いがあり、二〇〇九年六月に、推進員となりました。

合掌





## 第35回夏季仏教講座のご案内

☆日時 7月7日(火) ★開場★ 午後2時  
午後2時30分～午後4時30分

☆会場 堺市産業振興センター (旧じばしん)

☆講師 佐野明弘さん 石川県加賀市 光園坊 住持

☆テーマ 『涙をとりもどす時 ～ある帰還兵の人生から～』



★詳しくは同封のチラシをご参照ください。  
★また、お寺ごとに参加人数を集計しますので、  
ご出欠を所属寺にご連絡ください。

### ● 推進員の集いに参加して ●

去年十二月開催の「第二十一組推進員の集い」には、四十一名の参加者(住職を含む)があり充実した会となりました。皆様ありがとうございました。個人的には、東本願寺での最後の夜に、「宣誓文」がなかなかOKをもらえず苦労したことを思い出しました。同時に、当時の「聴聞に励むこと」「毎日勤行する」という思いが、今叶っているのかはなほだ心もとなくも思えました。

大橋先生のご講演からは、私が推進員としてなすべきことは、まず自分がお寺にわだかまりがなく出かけること、そしてご住職と仲良くなり、いろんな話が出来ること、まず自分にとってお寺が生活の一部になることだと思いました。また、本願文の三番目には浄土では皆が黄金に輝くことが誓われていると教えていただきました。それは私たちの今の願いでもあるとのことでした。今の時を一番よいと思える暮らしをこれからも考えていきたいと思っています。

四月十二日には、難波別院大ホールで大阪教区「全推進員の集い」が開催されましたが、藤井慈等先生のお話からも同じようなことが印象に残りました。今後聴聞で疑問が一つずつ解決するようになると考え、念仏申す推進員になりたいと思います。



大阪教区「全推進員の集いスタッフ」  
寺田 浩土(善正寺所属)

### あとがき

今、推進員を取り巻く状況は様々です。それぞれのお寺の事情から、住職・推進員一人ずつの思いの違いまで、とても一筋縄ではいきません。ところで、宗祖親鸞聖人は、法難によって出会った田舎の人々を「いし・かわら・つぶて(礫)のごとくなるわれらなり。」と呼ばれました。そこには「無用者なる私たち」というさげすみも、「かわいそう」という憐みもなく「私には、地を這いつくばってでも精いっぱい生きる仲間がいる。いや、私、親鸞がその一人である。」という力強い領きを感じられます。

そこで、本誌を「われら推進員」と名づけました。様々な事情を越えて、推進員の、住職の、そして縁あるすべての方々が、孤立することなく共に御同朋と呼び合えることを願っています。

事務局 山雄 竜磨